

緑爽会会報 No. 146

2016年10月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

10月例会/講演会 武田久吉と歩いた尾瀬

石塚 嘉一(記録)

期日: 10月7日(金)

講師: 穴田雪江、平野紀子

(注)穴田さんは1958年JAC入会、No.4756。1960年ヒマラヤのディオ・ティバ(6001m)に初の女性6人だけの遠征隊員として登頂に成功。自然保護委員、女性懇談会理事など。その間、女性の登山、特に海外登山を支援した。



—映画『私と尾瀬』から—

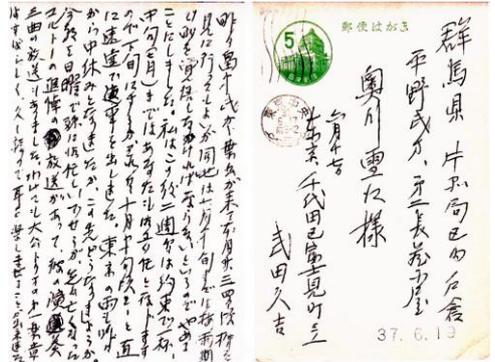
女性登山家の草分けで、戦後の1950年代に10年近く尾瀬の長蔵小屋で働いていて武田久吉と交流があった穴田雪江さんが、10月7日夜日本山岳会のルームで、尾瀬で見た武田久吉について語ってくださった。

日本山岳会の発起人の一人でもあり、優れた植物学者で、尾瀬の保護に尽力した武田久吉を直接知る人の話が聞けるとあって、ルームには緑爽会以外の会員も詰めかけた。

この日のお話にあたって、穴田さんから、交流を示す武田久吉から穴田さんにあてた数枚の葉書・手紙や写真のコピーが資料として配付された。昭和36-37年の消印のある葉書や手紙には、武田久吉が鳥海山に調査に行く予定やその手順、行ってきた後の報告、などが細かく書いてあり、自分の娘よりもはるかに若い、50歳も年下の女性に対しても丁寧な言葉遣いで対等に語りかけているところに武田久吉の人柄が見える。穴田さんが出した手紙や葉書にお礼を言っているものもある。宛先は、片品局区内戸倉 平野長英氏方 第二長蔵小屋奥川雪江様。(奥川は穴田さんの旧姓。)

昭和37年6月のある日の葉書では、「先日亡くなったコルトーの追悼の放送があって、彼の演奏3曲の放送もありました。わけても大公トリオの第1楽章はすばらしく、久し振りで耳を楽しませることが出来ました」と穴田さんに言っている。穴田さんと武田久吉とは音楽が共通の話題だったことが分かる。この日の話の中でも平野さんは、「外出から戻ったら、服を脱ぐ前にレコードをかけてクラシックを聴いていたと、祖父母から聞いた。それぐらい音楽が好きだったんだと思います」という話を紹介した。武田久吉の登山家・植物学者の厳しい姿の一方で音楽好きの文化人としての一面が垣間見られて興味深い。

案内にはなかったが、長蔵小屋の平野紀子さんも、春の雪解けから秋が終わるまで植物の調査に尾瀬を歩きまわる武田久吉の姿を撮った貴重な映画『私と尾瀬』（16ミリフィルムをビデオに変換）を持ってきて、平野さんが見た武田久吉との思い出を語って、穴田さんの講演を補ってくださった。さらに初期の長蔵小屋の、今では古びた、宿帳をいくつか持ってきて参加者に見せてくれた。長蔵小屋が小屋らしく登山客を泊めるようになって武田久吉が初めて長蔵小屋に来た頃の宿帳には、大正13年7月8日のところに、武田久吉、山口成一、館脇操の名前が記されている。



これは、平凡社の武田久吉『尾瀬と鬼怒沼』の中の「尾瀬再訪記」に出てくる日本山岳会員工学士山口成一君と札幌の北大植物園の館脇操君（のちの北大植物園長で北大名誉教授）のことである。その「再訪記」によれば、長蔵小屋に滞在して10日間尾瀬の植物を3人で調査している。時々平野長蔵が同行して案内している。

穴田さんが、長蔵小屋で働くようになったのは昭和28年（1953年）、20歳の時から。それから、春から秋まで尾瀬沼畔の長蔵小屋と尾瀬ヶ原の第二長蔵小屋で10年ほど働くことになる。「ヒマラヤに行きたいという思いがあったし、そのための資金がためられるし、休みがとれるから」と自己紹介の中で言った。それが穴田さんにとって尾瀬は初めてであった。（その前に、三平峠を越えて尾瀬から日光に出たことはあったが。）

「武田先生は毎年何回もいらっしゃいました。花のことをいろいろ教えて下さったが、私が何も知らないで、武田先生も、何も知らないんだなと思いながら教えて下さったのではないか」と当時を思いながら穴田さんは申し訳なさそうに言った。穴田さんが出会った武田久吉はこの時70歳。これから約10年、お二人の交流が続くのだ。

ここで、いったん話を止めて、平野さんの映画をみんなで見る。30分ほどのもの。

平野紀子さんによるとこの映画は、平野長蔵の息子長英氏（紀子さんの義父）が、武田久吉の尾瀬での活動を記録にどうしても残しておきたいと、自身で企画したものだという。昭和39年（1964年）に1年かけて撮影された。制作は福原フィルムス、カメラマンは梶原達男。武田久吉本人が女性アナウンサーとナレーションをしている。（企画し、出演している長英氏の声が入っていないのは、翌年にナレーションを入れた時には、その前の昭和40年1月に長英氏はスキー中に倒れ闘病生活をしていたから。）

81歳にしてかくしゃくとして歩く姿や張りのある声が印象的。植物の調査に尾瀬ヶ原の湿原を歩き回り、（公園のようにきれいに整備された現在の木道とは違う）倒木や板を敷いた湿原の道に行く武田久吉、長英の漕ぐ舟で尾瀬沼の上を行き、ある日は自分の娘さんと散歩する武田久吉が写っている記録映画だ。合間に武田久吉が尾瀬特有の数多くの花を季節ごとに紹介する。ハクサンシャクナゲ、ミズバショウ、タテヤマリンドウ、イワカガミ、トガクシショウマ、ミヤマエンレイソウ、リュウキンカ、ミツガシワ、タヌキラン、ニッコウキスゲ、モウセンゴケ、オゼコウホネ、トキソウ、

イワショウブ、ワタスゲ... 長蔵の墓の写真のところでは、「長蔵さんはいい人だった」と言っている。そして、「燧ヶ岳に雪が降ると... もう私も山を下りなければならない。私は尾瀬が好きだ」という武田久吉のナレーションで映画は終わる。見ていた会員から自然に拍手が起こった。

映画が終わってからの穴田さんのお話し：

「当時の尾瀬は、夏休みは人の出入りが多くあったけれども、春と秋は土日が混むだけで、他の日は本当に静かで、武田先生はそういう時に来ておられて、お供をさせてもらった。静かな時は、木道のないところを、歩いてはいけないのだけれども、武田先生は『いや大丈夫だから』と言ってどんどん歩いて行くことができました」

「只見川の最上流まで行った時は、倒木があるのをまたいで行くのに、武田先生は『はい』と言って手を出して、私の手をどんどん引っ張って行くけれど、私はそういう器用にすいすい行けないので...手を引っ張られて、やぶをかき分けかき分け、必死になって先生の後をついて行きましたね」
「武田先生は写真が上手でしたね。お家に伺ったとき富士山の写真をもらいました。サインをもらっておけばよかったですと思っています」

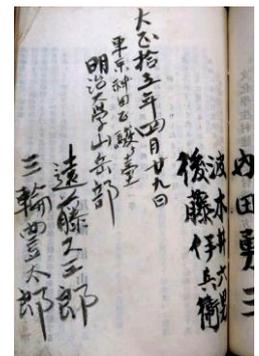
平野さんが武田久吉に初めて出会ったのは昭和 39 年、あの 16 ミリ映画が製作された年で武田久吉 81 歳のとき。「私が嫁に来た年なので鮮明に覚えている」

そしてそのあとも何度も尾瀬にみえている。(多分最後の年になった)昭和 43 年にも、長男がおなかにいた時まで、間違いなく尾瀬にお入りになっている」と語った。85 歳まで尾瀬に入っていたことになる。その 4 年後、昭和 47 年 6 月に武田久吉は 89 歳で亡くなった。

平野さんは、「大江湿原とか、一緒によく歩きました。先生はごみをステッキで刺して拾ってた。昼に食べ残したおにぎりがあると、夜の食事のときは、おにぎりを先に食べていた。ふつうの日本人より日本的だったと思います」と武田久吉と実際に歩いたときのことを思って語った。

武田久吉が初めて尾瀬に入ったのが明治 38 年 (1905 年)。その時の「尾瀬紀行」は『山岳』第一年第一号 (明治 39 年 4 月) に発表され、尾瀬が広く登山家に知られることになった。2 度目の尾瀬入りは、英国留学を挟んで、大正 13 年 (1924 年) 7 月。(前出『尾瀬と鬼怒沼』の「尾瀬再訪記」) それ以降、武田久吉は「本当によく尾瀬に入っている。札幌農学校の時代から、京大、九大、北大などの講師として勤めていた頃、いろんなときに (時には学生を連れて) 尾瀬に来ていることは、宿帳を見ればよく分かる」と平野さんは言う。その宿帳だが、武田久吉のほかに、今日でもよく知られている多くの登山家の名前が見られる、と言って平野さんは、松本恒廣さんの父君や木暮理太郎、大島亮吉などの名前があるところを示してくれた。

武田久吉は尾瀬をたびたびのダム建設の危機から救った恩人として記憶されている。古く大正 11 年頃の尾瀬貯水化計画には反対の第一声をあげたと言われている。特に昭和 23 年尾瀬ヶ原の巨大ダム計画が現実味を帯びた時には、反対の調査報告書を提出するなど、尾瀬の自然を守ろうとする地元の人や自然保護の人たちと一緒に尾瀬ヶ原がダムの下に水没するのを救うのに大きな力になったと伝えられている。早くから尾瀬の自然を調査して守ろうとする武田



久吉の活動は前出の『尾瀬と鬼怒沼』の「春の尾瀬」にすでに詳しい。この昭和2年6月の調査の日記には、すでに、地元で尾瀬の保全に努力する平野長蔵とその息子の長英が武田久吉一行を迎え案内する様子が出てくる。

戦争直後の尾瀬のダム計画について、平野紀子さんは「日本の発展には電気が必要だとしてGHQの人がすべてを決めたので、反対しようがなかった。長英だけは抵抗したけれども」と当時のことを語っている。「武田先生も『尾瀬沼は仕方ない。しかし、尾瀬ヶ原だけは絶対させない』と語っていました」と語った。

(尾瀬沼、というのは、尾瀬沼の利水権をもつ東電が沼から水を引いて下の片品村に小規模の水力発電に利用する当時の計画と思われる。)

この後、紀子さんが平野長靖と結婚して九段富士見町の武田家に挨拶に行ったときの話になって、平野さんは、「庭には植物の鉢がいっぱいあって、猫がいっぱいて、そのうちの仔猫を一匹いただいた。先生に名前を付けてくださいと言ったら『太郎とつけなさい』と言われ、小さなバスケットに入れて尾瀬沼に持って帰った。昭和43年に長男が生まれて、名前を太郎にしたので、先生に電話で、息子に太郎と名付けたのでどうしますか、と聞いたら、『じゃあ次郎にしなさい』といわれた」ということなど、和やかな話があつて2時間近く、武田久吉の思い出をめぐる穴田さんと平野さんのお話を終了。最後に参加者全員でお二人を囲んで、久しぶりに出席された近藤緑さんと共に、記念撮影。

当日の資料を要望される方には差し上げます。事務局に申し出てください



出席者＝30名 写真左から、

後列：近藤雅幸、小清水敏昌、西谷隆亘、伊藤博夫、田井具世、間瀬泉、梨羽時春、荒井正人、瀬戸英隆、夏原寿一、河野悠二、川口章子、北原周子、石塚嘉一、小泉義彦(撮影)
中列：松本恒廣、中村好至恵、吉田理一、田村佐喜子、鳥橋祥子、大島洋子、渡部温子、島田稔
前列：富澤克禮、平野紀子、宗實慶子、穴田雪江、近藤緑、宮澤美渚子、南川金一

9月山行 天覧山～多峯主山 ハイクの記録

…やれ、嬉しや雨一滴も降らず…

瀬戸 英隆

実施日：9月29日(木)

なにしろ本年9月の天気は異常で台風はいくつも発生し、上陸して被害をもたらし、東京地区の日照時間はなんと10時間とか。出発前夜も小雨が降り、共に幹事役の夏原氏から大丈夫？ と電話。

何の根拠もなしに行きましょうやと私。

で、当日朝から小雨ポツポツが家を出たら止んでいる。混雑のJRに遠慮しながらザックを抱え飯能に向かう。午前10時までに9名全員揃い、川口さんのご友人と若き高本君を入れて歩き出す。街中央の、飯能特産の絹を扱っていた店蔵「絹甚」を先ずは見学。さすがは緑爽会、皆熱心。

ついで観音寺と能仁寺に参拝し、いよいよ登山開始。広場に出てすぐ一本立て、再びコースへ。ちょっとした岩場を通過、左下はクライミングのゲレンデ。あつと言う間に頂上着。11時10分。少し早い昼食。記念撮影のシャッターはベテラン夏原氏。

12時少し前、本日の最高峰・多峯主山へ向かって歩き出す。下りあり、登りあり、湿地ありと変化に富んだこのコースは一番の絶景地。40分で頂上着。標高271m。ここでも夏原氏が全員をパチリ。

頂上からは下り一方、御岳八幡神社から下を見ると岩登りのゲレンデが見えるが現在は登攀禁止。本郷のバス停まで約40分。バスで飯能駅に到着。

ここで宴会部長荒井氏登場し、打ち上げは魚の居酒屋か、駅ビル内の中華かでひともめの末、中華に決定。富澤代表の発声で乾杯。ビールが喉に刺さる。

おりしも西の空に青空がのぞいた。

参加者=9名

左から 荒井正人、富澤克禮、川口章子、大村悦子(川口さん友人)、高本湧生、瀬戸英隆、島田稔、大島洋子、夏原寿一



9月山行「天覧山→多峯主山」所感

たかもと ゆうき
高本 湧生

(注)高本湧生: No.16079、今年度JAC入会、22歳、大学生。登山は、山好きの父の影響で始める。

29日10時、飯能駅にて集合。当日は雨中での登山になると覚悟していたのですが、実際は雨が降ることもなく、時折青空が覗きました!! 湿気、暑さが残るため、登山中、汗でぐっしょりとなりましたが、天候に恵まれたため、山頂からの眺めは素晴らしいものでした。(天覧山山頂地点で雲が立ち込めていなければなおよし!)

日頃は低山を登る機会はなかなかなく、今回の山行は私にとって新鮮な山登りとなりました。東京都心から在来線を利用し1時間足らずで山野に恵まれ土地に赴くことができることも新しい発見となりました。

登山のスタイルは十人十色。山には、何が正解だ、というものではなく、一人ひとりが大切にしている山との接し方があるのだと、今回の山行を通じて思い至りました。山においては文化、地層、植物、歴史等々、さまざまな楽しみ方が存在します。山頂で本を読むのもよし、コーヒーを飲むのもよし、写真を撮るのもよし、絵を描くのもよし。今後も、「山」が持つ魅力をいろいろ



瀬戸、高本 (撮影:荒井正人)

ろと見つけていきたいと思います。

初めは正直、不安でいっぱいでした！！ 御一行に失礼や迷惑がかからないかあれこれと考えていました。しかし、みなさんにご親切に接していただき、誠に気持ちのよい、充実した山行となりました。どうもありがとうございました。

(最後に中華を御馳走になり、大変恐縮しております。登山でたくさん汗をかき、お腹が減った後の食事とお酒は最高でした！！)

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

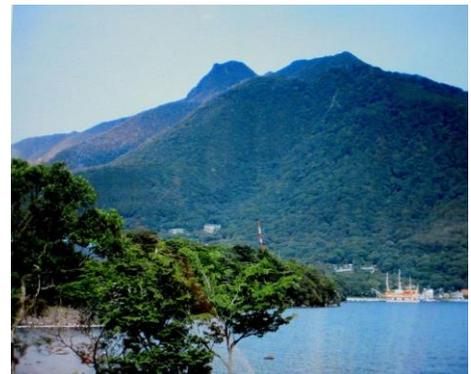
箱根の山を遊ぶ

中村 好至恵

私が足繁く箱根に通っていた時期は今からもう 20 年以上前で、つまり初心者の頃に、休みの日もなればどこかに行かずにはおれず、これと言った山を思いつかない時に小田急利用でも車でも手軽に行ける箱根についつい出かけたという次第。特に目標意識もなかったが、気づけば箱根外輪山をすべて歩いて、ということだった。しかし外輪山くらいならハイキングに毛が生えた程度で何度か行っていれば誰でも歩いてしまう。それは箱根が、自然が豊かに残されているように感じる観光地であるが、元をただせば、あそこまで自然を食い物に観光開発された山岳地帯、と言う特性に因る。視点の転換であるが、遊ぶ側としてはそれを上手く利用して楽しむことになる。

金時山は子供の遠足などで登る代表的な箱根の山であるが、山頂には当時からもうおばさん（以上？）と言った風情の「金時娘」さんが切り盛りしている茶屋があり、そこで天下の富士山を肴に一服するのを楽しみに多くのハイカーがやって来た。多くは仙石原の金時神社から登るのだが、矢倉沢峠を經由して足柄側から登るのも一興だ。峠から西に続く稜線の明神・明星ヶ岳も多くの登山者で賑わう山で、お盆の明星ヶ岳大文字焼きでは溢れんばかりの観光客が宮城野から強羅にかけて押し寄せる。日頃より高価な温泉宿だが益々目が飛び出るほどの価格となる。それに引き換え静かなのは東側の乙女峠や長尾峠に向けての道で、遠目からは分からないがそれなりのアップダウンがけっこうある。コース中ほぼ富士山は外さずに見えるのがいいところ、丸岳からは圧巻。

箱根山の中心的存在は言うまでもなく、神山と駒ヶ岳だが、今はその大涌谷側が火山ガス規制で入山禁止となっている。数年前までは見晴しも何もない神山に登り、冠ヶ岳の奇妙な岩を眺め、そのままゴロゴロ石の滑りやすい急降下を大涌谷に向かって一気に下りられたが、現在は硫化水素の猛毒ガス地帯となってしまっている。たいして楽しい道とは思わなかったが、今となっては貴重な経験かもしれない。そして駒ヶ岳へは神山経由で歩けばそれなりのハイキングとなるが、見通しも良くなく楽しみに欠ける。が、駒ヶ岳山麓側は一大企業レジャー施設となっていて、湖畔には「龍宮殿」もあり、隣接のロープウェイを使えば苦もなくペット同伴で山頂に到達できる。まさに観光開発の恩恵、ここは先駆者的存在だ。



撮影: 中村好至恵

そして芦ノ湖の西側。この6月に緑爽会メンバーで歩いた湖岸西部は、水際を気持よく歩ける遊歩道で時折湖岸にも出られる魅力的なコースだったが、この湖を囲む外輪山稜線上にも遊歩道がある。但し、スカイラインと称する車道が並行して走っているのがちょっと‘閉口’だ。西側稜線部一番の見どころは三国山とその樹林、それに続く芦ノ湖の眺めだと思う。大きなブナ林に包まれ、その樹林越しに眼下にはカルデラ湖、そして稜線を進めば火山形成の手本のような駒ヶ岳と神山の姿が綺麗に眺められる。この景観は背丈の高い笹原や樹林で見え隠れはするが（しかしそのおかげで車道の騒音と排気ガスがかなり軽減されている）、稜線上を歩く際の大きな楽しみでもある。この芦ノ湖と箱根山の構図は中川一政など名だたる画家の作品となっているほど完璧なものであり、眼に心地よいものであるはずだ。

途中ではドライブ・インに飛び出し、冷たいモノの補給などには事欠かないが、その先の道のりは意外と長い。少々疲れた頃に、それまでの山中とは異次元的な人の多さの箱根関所付近の観光地に飛び出す。そこがまたミソである。バス路線には事欠かない箱根であるが、万一マイカーを出発点の桃源台駐車場に残して来ても心配は無用だ。海賊船に乗ればいい。赤や金のデコレーションをあしらったド派手な船で出発点まで運んでもらえる。歩き疲れた足を休めながら、フィナーレは海賊船からの湖上見学と洒落こむ。これぞ一大観光地ならではの‘自然探勝’の締めくくりである。

その名はベント

夏原 寿一

いま、パソコンに向かって原稿を書いている私の部屋の壁に1本のピッケルが掛けてある。その名はベント。そのベントがここに来た経緯を話そう。

1976年の秋、ヨーロッパ数カ国への出張の際にスイスの取引先を訪問した時のことである。仕事が終わって担当者与会食をしたとき、お互い山ヤであることが分かった。彼は「日本にもアルプスがあって、森林限界は2500m位だそうだが」などと日本のことに詳しい。そんなわけで話しは大いに盛り上がった。

帰国してから礼状を出したのだが、そこに「今度スイスを訪れたらグリンデルワルトに行ってベントのピッケルを注文したい」としたためた。暫くすると返事が来て「ベントに電話をしたら『当人の身長と体重が分かれば作る』と言っているので、よければ連絡を」とある。即、お願いしたのは言うまでもない。

翌年の初夏、段ボール箱に入ってピッケルが送られてきた。ピックには、あのベントの銘が、その裏には“J.NATSUHARA”と刻印されている。シャフトに亜麻仁油をたっぷりしみこませて初めて雪の上に持ち出したのは翌年、残雪の八方尾根だった。



～～《予告など》～～

11月山行 5日(土) 「湘南平に岡野金次郎碑を訪ねる」 担当:松本恒廣
晩秋の一日、大磯海岸より高麗山(168m)に登り丘陵コースを散策するプランです。
軽～い散策のスタイルにナップザック程度でどうぞ
集合: 12時 東海道線・大磯駅(海側)改札口前に集合 雨天決行
コース: 大磯駅→大磯海岸(昼食)→旧東海道松並木→高来神社→高麗山→湘南平→
島崎藤村旧宅→大磯駅
・解散後、大磯海岸にて新鮮なサカナで懇親会を予定しています。(希望者のみ)
申込み: 11月2日までに松本へ

岡野は横浜で生まれ、後年、同地のスタンダード石油に勤務。ここで、ウエストンの『日本アルプスの登山と探検』を読む。親交のあった小島烏水と横浜山手牧師館にウエストンを訪ね、これがきっかけとなって山岳会が誕生する。その岡野のレリーフが後年、彼の移り住んだ平塚市の湘南平に建っている。・『山』824号(2014.1.20) 東西南北欄 砂田定夫会員の記事参照
*当日、神奈川支部の川俣俊一会員と砂田定夫会員が参加されます。



12月例会 22日(木) 4時～ 集会室
・お話しとスライド上映「初めてのヒマラヤ」 荒井正人
・忘年会: 軽食を用意します。
会費: 1,000円 差し入れ歓迎!
申込み: 12月15日までに下記へ
夏原寿一

1月山行 14日(土) 七福神巡り 詳細は次号でお知らせします。
2月例会 講演会を予定しています。 詳細は次号でお知らせします

訃報 田部井淳子さんが10月22日、他界されました。田部井さんは1991年当時、自然保護委員会委員として活躍しておられました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

----- 編集後記 -----

講演会『武田久吉と歩いた尾瀬』は2014年2月、講演会『お茶の水時代の人』で「武田先生と尾瀬を歩いた・・・」という穴田さんの思い出話を伺ったのがその発端。「110年前の山岳会発起人のひとり、武田久吉と尾瀬を歩いたとは・・・、もっと話が聞きたい」との思いから◆共に話し下さった平野さんは、武田が足繁く尾瀬を訪れていた頃の宿帳をご持参下さった。毛筆で書かれた多くの名前、まさに尾瀬の歴史を語る資料だ。そこには松本恒廣さんの父上のお名前も! ◆近藤緑さんから渡部さん宛に「とても良い企画」とのお便りが届いた◆資料として配付された、武田から穴田さん宛の手紙について、南川さんから「武田久吉からの手紙をお持ちだったとは驚き。映画からも新しい発見があり、好企画だった」とのお電話を頂いた◆そして開会前、JAC の歴史と共に歩いて来られた方々の“同窓会”のような雰囲気。これも良かった。あれこれ、いいことづくめの行事だった。

9月山行の感想を寄せてくれた高本君は、過日のオリエンテーションで瀬戸さんが声を掛けて山行に参加。瀬戸さんは「将来はヒマラヤを目指せ!」とハッパをかけている。

・報告記事は実施順に掲載しているが、今号はメインの記事「武田久吉・・・」をトップにした。 (夏原寿一)

カット: 中村好至恵 写真: 夏原寿一